百五柱の尊い犠牲者（旧木立村）

林　寅喜
（会員　佐伯市中の島）

太平洋戦争の発端となった日支事変が始まったのが昭和十二年（一九三七）七月七日のこと、直ちに在郷軍人（兵役経験者で一定年令以下の人）の人たちへ召集が掛けられ、来る日も来る日も出征する人の見送りが続いた。

当時木立は土井の外れに船着き場があって、二十人位は乗れる客船が市内の浜丁、今の池船橋下（現在は埋め立てられて道路敷となっている）との間を往復していたので、小学生や一般の見送りは土井までであったが、近親者や身内、また親しかった人など船や自転車で町まで出て、駅まで歩いて見送るのが習わしであった。これは終戦の年まで続けられたが、不幸にして故郷の土を再び踏むことの出来なかった人、或は生還はしたものの戦傷や冒された疾病がもとで世を去った人など、その数合わせて百五柱にのぼる。

この百五柱の人たちは軍人と軍属の別なく、作戦行動中に戦死した人をはじめとして、戦場に赴く途中の輸送船で攻撃を受けて船もろ共海に消えた人や、海軍で軍艦と運命を共にした人、また、戦傷を受けて手当ての甲斐もなく無念の死を遂げた人、言語に絶する過酷な条件の中で病を得て命を落とされた人、或は戦傷や冒された疾病のため戦後死亡された人などで、最高年者四十四歳から最年少者十六歳まで、平均年令二十六・八歳という若さで、前途有為な人たちが国の礎となって命を捧げたのである。

木立公民館に、戦争に従軍し復員した人の名簿がある。それによると約二百二十人の復員者があるが、洩れた人を含めると実数はもう少し多かった筈である。また、これに村出身の戦没者を加えると、太平洋戦争に従軍した人は三百二十人位になる。

戦後間もない昭和二十二年（一九四七）の大分県統計年鑑によると、この年木立村の総人口は二千七百五十五

人である。当時はまだ復員と一般民の外地引揚げが完了していなかったので、多少の違いはあったにせよ、総人口に対する割合は一一・六パーセントにもなり、村民十人に一人は従軍していた計算になる。一方、戦没者（木立だけ八十九柱〈後述〉）の割合は二七・八パーセントであるから、従軍者四・五人に一人の犠牲者であったこととなり、その数値は異常である。

この調査は遺族会をはじめ、招魂社（戦没者を祀る社で熊野神社境内にある）や木立公民館に問い合わせたが、私の望んだ内容を知ることはできなかった。そこで昭和六十三年八月から、示された名簿をもとに独自に調査して、出身地区毎に氏名・陸海軍々属別・生年月日・戦没月日・満年齢の五項目だけについて名簿を作成した。

なお、調査では木立で生まれ育ったが養子縁組や分家等、故あって他町村へ移住した人七人と、戦後引揚げや縁故をたよって永住のため、転入して来た遺族九戸の計十六人も含んでいる。したがって、木立だけの戦没者は八十九柱である。その内訳は別表の通り。

戦没者累計表

(一)陸海軍々属別累計

種別	戦没者数	摘要
陸軍	七八	
海軍	一七	
軍属	九	
義勇軍	一	
計	一〇五	

(二)年別戦没者数

年別	戦没者数	摘要
昭和一二	三	日支事変始まる
一三	四	徐州占領・武漢攻略
一四	五	海南島上陸・ノモンハン事件
一五	一	北部仏印へ進駐 日独伊三国同盟
一六	二	南部仏印へ進駐 ハワイ真珠湾奇襲
一七	三	マニラ・シンガポール・ラングーン占領 ミッドウェー海戦
一八	五	ガダルカナル島撤退 アッツ島・マキン・タラワ島全滅
一九	三二	サイパン・グアム島上陸全滅 マリアナ沖海戦・米軍レイテ島上陸

一一〇	四〇	硫黄島全滅・米軍沖縄上陸 原爆投下・敗戦
一一一	三	
一一二	三	
一二五	三	
不明者	一	戦後転入
計	一〇五	

(三)年代別戦没者数

年代	戦没者数	内訳
一〇代	一〇	陸軍三、海軍四、義勇軍一 陸軍属一、海軍属一
二〇代	五六	陸軍四九、海軍七
三〇代	三四	陸軍二三、海軍五、陸軍属一 海軍属五
四〇代	三	陸軍一、海軍一、海軍属一
不明者	二	戦後転入
計	一〇五	

(四)地域別戦没者数

地域名	地区名	
桟敷	角道・岡山・西の平・岸の上 前方・永野・大中尾	四五
中野河内	小中尾・沖・迫・目筈・宮河内	二五
大野	大野・原・岡・築良田・須留木	三五

御覧のように、戦争も敗戦の色濃くなった十九年と二十年に集中して戦没者が多い。年齢層にしても二十代・三十代が突出している。

以上これまでに示した数値は、何も木立のみに限らず、どこの村でも同じような犠牲者を出していたのではあるまいか。

私たちはこのような尊い犠牲者に対し、御霊の永久に安かれと祈りながら今日の平和と繁栄を感謝し、二度と再び愚かな戦争などしないと、肝に銘じて心に誓うものである。

【追記】この草稿は平成二年五月発行の私著『改定版私のふるさと史考』中より補稿して転載したものです。